第515号昭和63年5月20日発行（毎月20日発行）
昭和48年8月31日 第三種郵便物認可

1988年（昭和63年）
5月号（No. 515）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

二つのアクシデント　鳥居　亮…（1）
三国友好合同登山成功へ
海外の山……（2）
「アイゼンと馬糞」
「H.A. カーター氏来日」
「三国登山隊中世古隊員より」
焼山山行で見た標識と木地師
富山支部・石坂久忠……（4）
自然保護随想……（5）
図書紹介……（6）
「Mountaineering in the Andes」他7
三国合同登山隊事務局だより……（6）
望月達夫文庫目録（つづき）……（10）
東西南北……（10）
報告……（11）
「九州四支部連絡会開催」
会務報告・ルーム日誌等……（12）
新入会員・住所変更等……（12）
お知らせ……（13）
高所登山研究委，婦人懇談会，海外委，フィルム委，科学研究委，越後支部，集会委，総務委
「1988 大雪の集い」（北海道支部）

二つのアクシデント

鳥居　亮

昨年の十一月中旬、久し振りに晩秋の火の山阿蘇を訪れました。十一月十四、十五日は熊本支部創立三十周年記念集会の日であり、また奇しくも満五十年前の昭和十二年十一月十四日は、旧制第五高等学校山岳部匂坂パーティの、阿蘇高岳鷲ヶ峰北壁におけるザイル切断事故の日にあたります。

熊本で故匂坂正道君の墓参をすませ、熊本支部本田誠也氏の車で紅葉の残る阿蘇路を走り、事故時刻の正午過ぎには仙酔峡近くの鷲見平上方まで登って、赤ガレ谷越しに鷲ヶ峰北壁を仰ぎ見ました。目の前でスリップに伴う落下衝撃でザイルが切れ、二百米余りも転落する悲劇的事故となった当時の状況が、走馬灯のように思い出される悲しい追憶の中で、黙祷を捧げ供養をしたのですが、五十年にわたる心の中のわだかまりは、そう簡単に消え失せるものではありません。事故のルートが現在でも匂坂ルートとして、名前が残されていることを聞き、感慨無量でした。

信頼感のあった舶来のザイル（セクリタス右巻き）が切れたということで、関係者にとって精神的なショックは計り知れないものがありました。この悲しみを再び繰り返さないため、五高山岳部（当時の五高山岳部の会員番号は七五二）から日本山岳会への問い合せとなり、若き日の故黒田正夫氏が次のように解析して下さいました。衝撃力というものは落下勢力を、どれだけの変位か、どれだけの時間で、食い止めるかにより決定される。即ち落下を食い止めるに要する時間の自乗に反比例し、食い止めるまでに伸びた変位に反比例する」ということを、力学上から説明して下さったのでした。なお事故の状況と黒田氏の解析は、「登山とスキー」十三年二月号に掲載されています。

当時このようなザイル切断事故は、早稲田大学山岳部に次ぐ二番目の事故であると聞いていました。後年、春日俊吉著「山岳遭難記1」（三十四年二月五日発行）の「阿蘇鷲ヶ峰の切れたザイル」の記事の中に、早大山岳部の事故についても言及してあります。ザイル切断については触れておりません。春日氏の記事は、事故年月日に一年の食い違いがあり、名前も少し違っています。事故は涸沢槍をトラバース中と書いてあります。これらの食い違いについて、十二月五日に年次晩餐会の折、早大山岳部員であった鈴木正俊氏にお尋ねしましたところ、翌日回答をいただきました。年月日は昭和七年七月十二日、名前は加藤才介氏で、折井氏の記事が正しいことは当然のことですが、二人パーティで涸沢槍登攀中、加藤氏は落石を眉間に受けてスリップすると殆ど同時に、落石はザイルにも当って切断したという痛ましい事故であることが判明しました。そうすれば、落下衝撃によりザイルが切れたのは、五高の事故が最初ということになるようです。

十一月十五日、熊本支部の記念山行（春日俊吉著「帰らざる登攀者」にも同様の記事がありますが、は会報「山」四四八号（五十七年十月）に、故折井健一氏の「ある遭難」という記事があります）。これについて

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話
234六六五九

で登った根子岳、根子岳から望見する鷲ヶ峰、この二つの山は、五高時代のさまざまな思い出の織り成すドラマの舞台でした。

もう一つは、私が顧問をしていた大学（神奈川工科大学、旧幾徳工業大学）山岳部の涸沢合宿中の五十三年七月二十六日、高田良一君が涸沢槍の鎖場付近で落石を受け、滝谷D沢上部に転落するという悲しい事故がありました。八月下旬、救援でお世話になった警察署、営林署、山小屋に挨拶廻りし、事故現場近くまで行って彼の冥福を祈りました。その時、風の制御に苦労している穂高の風車を見たのでした。後年風車の実用実験を始めるに当り、実験場所の選定には、このような穂高の風車との不思議な出合いがあったのでした。事故現場から千米も離れていない穂高岳山荘に行くたびに、彼の霊を慰めてやりました。六年にわたる十数回の実験に、山に殆ど経験のない六十名の学生が参加して無事故であったのは、彼の加護によるものと思わざるを得ません。

蜂谷緑女史の原作脚本になるラジオドラマ「穂高岳にまわる風車」の舞台ともなったこの実用実験は、やがて太陽電池とのハイブリッド（複合利用）となり、実用化を達成したのでした。クリーンで無尽蔵にある自然エネルギ

海外の山

アイゼンと馬糞

二月から四月の初めまで二ヵ月間モンゴル人民共和国にいた。昨年から通算三度目のモンゴルの旅で、今回は冬から春にかけての遊牧生活取材が目的である。

さまざまな貴重な体験があった中で忘れられないのは、凍てついた北の湖で馬そり隊の一行に遭遇したことだった。

標高千七百㍍の山地に、フブスグルという名の湖がある。琵琶湖の四倍以上ある広大な湖で、無論、冬は厚く凍結している。その上を、ソ連国境から搬入した物資を満載して数十頭の馬そりの一行が進むのである。

アイゼンというのは登山用具のこと、とだけ思いこんでいる山の人々の知恵では理解できない。一頭あたり一・五―二㌧もの重荷をなぜ曳けるのか、その秘密は、馬たちのひづめにはめこまれた鉄の爪にあることに間もなく気づかされた。硬い氷に馬たちはアイゼンをしっかりきかせながら進んでいたのである。

フブスグル湖は透明度の素晴らしさで知られ、夏にはまだ多くはないが、観光客が湖畔にやって来る。将来はモンゴルの代表的な観光地の一つにしようという計画があり、そのせいもあって環境保護には国も地元も力を入れている。

―だから、馬そり隊の往来には実は反対する声もある。

馬が残す糞（ふん）が、湖水の汚染源になる、というのだ。

凍った湖上にはトラックも特別に許可を得た上で走っており、車が時に落すガソリンの汚染の方が無論深刻だから、環境保護の立場からはこちらも締め出すべし、という声が強い。

馬そり隊の人たちは、そんなわけで帰る道すがら馬たちの落しものを拾ってゆく。それでも残ってしまうものは月一、二回車が見まわって収納するそうである。

三月初めとは言え、湖氷で馬そりの一行と出会った日は、気温氷点下三十三度だった。少し風が吹けばじっとしていられない寒さの中でも山の人々は馬糞の始末を考えるのか、と一瞬呆然としたことを覚えている。

モンゴル人民共和国は、おそらくこの七月に初めて人口が二百万人に達する、住民の数だけで言えば日本の一都市並みのこじんまりした国である。しかし、日本の四倍以上を誇るその国土が、どんなに人の手の入っていない、荒けずりの自然を残しているかは、私自身のつたない体験からしても言うことができる。

「いまのうちに環境問題を考えておかなければ手遅れになりますから」と、湖畔の町の幹部は言っていたが、そういう国でともかくも、山や湖や川の保護がかなり具体的にうち出されているのだった。

状況は全く違うだろうが、ブータン王国の外国隊への一部登山禁止措置につながる発想と言えるかもしれない。

モンゴルの楽しみの一つは、夜、満天の星を見れることである。冬、長時間、外に立ちつくすのはいささか厳しい試練となるが、漆黒の空にダイヤの白い光を放つ無数の星々は、大自然への畏敬の感情を素直に湧き上がらせてくれるところがある。

（江本嘉伸）

ー利用（風力、太陽光、水力発電）の実用化は、山小屋のエネルギー源として、急速に普及して来ました。そして日本、中国、ネパール三国合同のエベレスト登山隊の、通信設備の一部の電源に利用されており、さらにこの程、南極などエネルギー源の確保が困難な地域に対してのプロジェクトがスタートしました。近い将来その実用化が期待されています。

上級生と教え子を失ったこの二つのアクシデントは、私にとって終生忘れることのできない悲劇でした。しかし、今日自然エネルギー利用の実用化という面で、多少なりとも山岳関係者へ貢献できているとしたら、まさにこの両君の魂の導くところに他ならないと思われてなりません。改めて両君の冥福を祈りつつ、筆を置く次第です。

三国友好登山隊

北側第一次縦走隊はABCを出発

北側登山隊長・橋本　清

北側登山隊は四月十八日には第二期ステージを終了し、全隊員はベースキャンプに集結、休養を取りました。

第三期は四月二十三日に始まりました。第三期は残り約三〇％の荷揚げと、C7建設、アタックとなります。

海外の山

ヒューバート・A・カーター氏来日

吉沢一郎名誉会員の永年の友人であるアメリカ山岳会名誉会員（その他、アパラチヤ山岳会、ハーヴァード大学旅行会、ヒマラヤ山岳会、英国山岳会、ポーランド山岳連盟等の名誉会員）ヒューバート・A・カーター氏が来日される。氏の日程は四月二十四日に成田着、東京に一泊後、京都、奈良に滞在。四月三十日北京へ、再び六月二日に再来日され、五日に帰国される。本会としては、六月四日（土）に氏の講演会と歓迎会を準備している。

氏の略歴を吉沢一郎氏の「忘れえぬ人たち」から抜粋してみよう。

カーター氏は一九六〇年より、アメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集長として、同誌を、アルパイン・ジャーナルやドイツ山岳年報と並び、世界で最も信頼出来る一流の山岳会誌に仕たて上げた。これは氏の名編集長であることはさりながら、氏の世界の山岳界にひろがる広汎な人脈と不断の努力と献身、並びに豊富な語学力に依るものが大であろう。

氏は五歳（一九一九年）の時、ワシントン峰（一九一七㍍）を登ったのが最初で、十五歳の時、既に幾つかのヨーロッパ・アルプスの高峰に登っている。一九三三年、アラスカ、クリヨン山（三八七九㍍）を試登、翌、一九三四年、同峰をウォッシュバーンと共に初登頂。またアラスカ海岸山脈の初横断。一九三五年、「ナショナル・ジオグラフィック」の依頼で、ユーコンの南西隅にある最後の空白部の地図作成。一九三六年、米英合同隊のナンダ・デヴィ（七八六一㍍）に参加。またこの一九三四年からの三年間は、ハーヴァード大学スキーチームのキャプテンを務め、一九三七年には世界選手権大会におけるアメリカチームのメンバーであった。一九五七年から一九六六年まで五回、隊長としてマッキンリー（六一九四㍍）周辺での諸活動。また、アンデス山脈では、一九五六年、オホス・デル・サラート（六八八六㍍）へのアメリカ山岳会隊隊長として遠征以来、一九五九年より一九七三年までブランカ山群に、隊長として十一回活動。一九七五年、一九七九年、アンデス、ワイワッシュ山群への遠征隊長。一九七四年、K2西側偵察、隊長。一九七六年、北西側から北稜経由のナンダ・デヴィ初登頂。隊長は、カーター氏とアンソルド氏。この時、アンソルド氏の娘、ナンダ・デヴィ嬢がC4で死亡したのは有名な話である。

氏は、政治的に現在よりはるかに困難であった頃から、東欧ブロックのユーゴスラビヤ、ポーランド、チェッコスロバキア等を訪問して、それら登山家達と非常に温かい関係を保持した。またアメリカ山岳会はソ連山岳連盟と友好交換登山をしていることは周知のことである。このように、普通では出来ないくらいに自らも遠くの山に出掛け、常日頃から世界の山男たちとの人間的な交流と友情の保持に努め、その結果として、自然に集ってくる世界の隅々からの情報を整理分類して、アメリカン・アルパイン・ジャーナルを世界で最も権威のある山岳年鑑にしたカーター氏の功績は讃えてもあまりあるものと言えよう。

また吉沢一郎名誉会員の他、わが国の岳人で氏のお世話になった方々は多数あるとのこと。旧知の方々を始め、新しい方々も含め、氏を交えての楽しい歓談を期待したい。

（海外委員会）

三国登山隊（南側）中世古隆司隊員より編集あて

お変りございませんか。南側本隊は予定通り、三月九

海外の山

今回の最大の目標であります五月五日の交差縦走に向け、四月二十九日、中国、ネパール、日本の三国は第一次、第二次の縦走隊よびサポート隊のメンバーを発表いたしました。

第一次縦走隊メンバーは山田　昇、アン・ラッパ、次仁多吉。サポート隊メンバーは山本宗彦、ラッパ・ソナ、李致新。第二次縦走隊メンバーは三谷統一郎、アン・カミ、達窮（ダチュン）。サポート隊メンバーは、馬場哲也、タシ・ザンブー、羅則（ロンジェ）の以上十二名です。

第一次隊はABC（六五〇〇㍍）を四月三十日に出発し、五月五日の交差縦走にむかいました。第二次隊は五月三日にABCを出発、五月八日の交差縦走に向け出発します。五月上旬は登山隊にとって最重要期間に入り、天候が非常に気になる毎日です。隊員一同元気に交差縦走にむけ、がんばっております。

（四月三十日、北側BCにて）

＊

チョモランマ　交差縦走成功

五月五日、北側第一次縦走隊の三名が登頂し、約二時間後にネパール側に縦走。途中、南峰との鞍部で、南側縦走隊員（中国二、ネパール一）と会った後、南側キャンプに泊り、翌日BCへ無事下山した。南側縦走隊員三名も、北側縦走隊員に会ってから登頂し、北側から登頂してテレビ中継に成功したテレビ隊（日本三）、サポート隊（日本一、中国一、ネパール一）と会い、中国側へ縦走し、テレビ隊、サポート隊と共に無事北側BCへ下山した成功後、北側BCからファックスで会報編集宛に送られる大塚副緒隊長のメッセージは次号会報で。（編集）

海外の山

日離日、バンコック経由で十日夜カトマンズ入りしました。一時間程前に王隊長以下二十二名の中国メンバーも到着していて、一部の人を除く初顔合わせをしました。皆、屈強な若者です。もっとも翌日、明るいところで見た彼らは幼な顔の残る者もいて、気の優しい好青年といった感じです。

私にとって一九八〇年以来のカトマンズは空港への道路が良くなったこと、バザールのなかにTV、ラジカセ、ビデオテープ、カメラ、DPEの店がよく目につくことです。バザールのたたずまいや賑いは相変わらずですが、当然のことながら、中世の面影を残すといわれたカトマンズも日々変化していることに気がつきます。

さて、これからが大変でした。次の飛行地であるルクラに降雪があり、一週間フライトがなかったとのことで、先発隊の居残り二隊員が十二日にフライトでき、本隊と中国隊も十四日から毎日飛行場通いをしましたが、十四日十二名、十五日十二名、十六日～十八日失敗に終り、遂にタイムリミットということで、湯浅隊長よりNMAを通じ軍隊のヘリコプターを要請、十八日十二名、そして今日、十九名、全員がやっとルクラへ上ることができました。先発隊の先頭は五日行程ほど先のペリチェにいるとのことです。

私自身について言いますと、十四日は飛行場で昼過ぎまで待って、ルクラ強風のためキャンセル、十五日は三機に分かれ、私の乗る機が最初でしたが、タイヤのパンクのためキャンセル。十六日はホテルを出ようとしているところへ連絡が入り、ルクラが悪天のため中止、十七日は昼近くまで飛行場で待って、またもやキャンセル。十八日にやっと搭乗でき、八時三十五分離陸したときは、思わず皆で拍手しました。ところが途中から、どうも様子がおかしいと思っていたら、カトマンズにUターンし、ヒマラヤの見えないヒマラヤン・フライトに終ってしまいました。そして本日、軍のヘリコプターでやっとルクラ入りすることができました。

若い隊員の弁、「ルクラへの道はアイスフォールより険しい」

ルクラの集落はシェルパ族が主体で、やっと山登りに行くんだという雰囲気が盛り上がってきています。

（三月十九日　ルクラにて）

焼山々行で見た　標識と木地師

富山支部　石坂　久忠

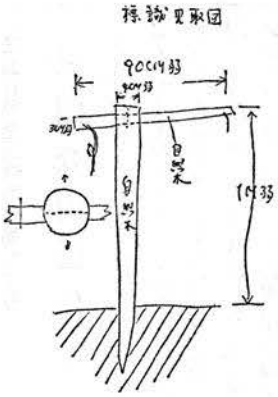
秋の晴れ渡る日をみて支部の数人と共に焼山々塊に入った。

大曲り付近が近くなると山葡萄の果皮が十数粒ずつ十メートル程毎に散在していた。人が入っている気配がしてならなかった。野木瓜の紫色の皮が白樺の黄葉、七竈の紅葉の内に垂れ、いかにも印象的で美味しそうだ。手に採って口に入れる。円やかな味は高原の珍味だったし、加えて万年雪の色味も格別だった。突然、前方に得体の知れない自然木で造られたT字型の人工物に出会う。

同行者は霊気がすると言う。気味が悪いと言い出す者もいた。私は過去の

山行で、今見ているものと良く似たものに出逢ったことがあったが、このものは少し異っていた。と云うのは「山羊の髭のようなもの」が刃物で材部を削って垂らされていたことだ。

早速コンパスを出して方向を験してみると、自然木の長い方が「東（E）」を指しているのである。これもまた不思議の一つであった。風などの悪戯で廻ったのだろうか？ 触ってみると廻るようでもなかった。深く指し込まれていた。普通なら北を指していると考えたのだが。造った人の掟や習慣があってのことだろうが、不勉強のため知る由もなかった。後日の宿題として現場を去ったのである。



焼山で見た標識

《自然保護随想》

スキーツアーについて

ゲレンデ・スキーのシーズンが終り、テレビのスキー番組が春山スキーの楽しさを宣伝している。快晴の春山の木立を縫って、ザックを担ったスキーヤーをリーダーとして、サロペットの女の子が二人、テレマーク姿勢でシュプールを描く、優雅ともいえる姿をテレビの画面は、これでもか、これでもか、とばかり映し出している。

天候は快晴、雪崩の危険もない山なら、春のスキーツアーほど壮快なスポーツは少なかろう。最近まで、少数のベテランだけの世界だった春山も、若者の間にはレトロ・ブームとかで、テレマークなどの古典技術と共にビリヤードと同列の存在として見直されているらしい。

レジャーの多様化がいわれ、旅行会社も新商品の開発の一環として春山のスキーツアーに目をつけるのは当然というべきだろう。大手の旅行会社が『山スキーのベテランをリーダーとする〝春スキー〟の団体ツアー』を募集して、数十人が参加するほどの盛況だという。

大石武一元環境庁長官が主宰する『尾瀬を守る懇話会』が、尾瀬の美しさを可能なかぎり保存するために、当面の緊急対策と将来の対策の二つに分けた提言（案）を作成し、その緊急対策のなかで『スキーツアーの禁止』という項目があったので、その真意と目的を聞いたところ『少数のスキーヤーの汚染なら問題にすることもなかったんだが、最近は団体による尾瀬スキーツアーが多くなってきた。スキーヤーの汚染による湿原の富栄養化も問題となってきた』という答えであった。

水芭蕉で有名になり、年間六十万人という尾瀬沼、尾瀬が原への入山者が出す雑排水や糞尿の処理が問題とされてから久しいが、いまや春山スキーまでが、湿原の富栄養化の要因となるほどのブームとは知らなかった。

冗談ではなく、日本の山も『ゴミを持帰ろう』だけではなく、『山へは便器を持参』の時代が来ているのかも知れない。

（関塚貞亨）

次代に残そう美しい山と渓

こうしたものが、木地師（器地師）の標識か焦夫のものか、または猟師のものかとも考え木地師を尋ねることにした。そして糸魚川市大所木地屋の小椋（クラ）氏を訪うことになった。

小椋氏の姓は全国的に珍らしい姓である。惟尊親王（清和天皇の弟）が近江国（滋賀県）の小椋谷で、ろくろ技術を授けたとされている。

木地師は「勅許院宣の職頭にして諸国山在致し恐なく営業相勤める」ことになったというが、当の小椋氏の祖先が現在地に居を成し得た以前は、飛騨（岐阜県）の小椋幸左ヱ門、小椋弥助と共に同地に来り、二十年余住居、その後、小谷村来馬山に転居（木地材料を求めて）云々と文書に印してある。こうした方々の伝承からも前述のようなことは伝えられていないということを確め得たが、今もって標識の意味することは解することなく終っている。ご教示を得られれば幸いである。

三国合同登山隊事務局だより

三国登山通信

北側のベース・キャンプには、テレビ生中継用の直径七メートルのパラボラ・アンテナが設置され、インマルサットを使用しての電話回線により、BCよりの電話は即時通話。ファックスは直ちに、東京の諸兄、チョモランマ室、あるいは山岳会留守本部に入ってくる。また、カラー写真の電送も可能となった。従って、時差の有利さを加えれば、東京―ニューヨーク間のビジネス通信も顔まけの便利さである。こうなると、従来の遠征の時のような、タイム・ラグによる神秘性は全くなくなる。遠征を出した後、一体どういうように展開しているのか、不安と期待をこめて待つ、などというロマンのかけらもなくなってしまう。昨日のことは、今日の新聞に、鮮明な電送写真と共に掲載され、誰がどうしたかも手にとるように分かる。頂上アタック用のテレビ・カメラは、ヘルメットの中に内蔵され、以前のように、ひたすらカメラを構えるなどという格好よさは、全く必要ではなく、唯、登ってゆけば、ヘルメットの中のカメラが自然と撮ってくれるという仕組みになっている。読売のチョモランマ室に設置された器具は、ボタン一つでベース・キャンプを呼び出せるし、またボタン一つ切替えれば、ファックスが流せる。

二月二十二日、北側の本隊が東京を出発し、三月九日、東京の留守本部は、早速、「三国友好登山隊の皆様へ」とBC向け、ファックスを流した。いわく「東京―チョモランマBC電話回線開通をお祝い申し上げます。三国友好登山隊の皆様、本当にご苦労様です。……以下略」すると翌、三月十日、重広恒夫登攀隊長より、事務局、中沢光江嬢宛に、「毎日ご苦労様です。インマルサットが通じたので、テレ・ファックス等、心の安まる時が無いかも解りませんが、お願いしたいことがあります。……以下略」。これより、留守本部は、連日のファックスで、心の安まるどころか、きりきり舞いをさせられる仕儀と相成る。三月十二日、事務局は早々と重広登攀隊長より、羽毛シューズ、ミトンについての連絡が不充分であるとの怒りのファックスを受ける。こうして連日のようにBC―東京留守本部間でファックス、電話でのやりとりが始った。

このように、ビジネスそこのけの文面の中に、さすがに遠征らしく、末尾に、「いつの間にか白い雪におおわれた大本営より」、とか、「今日は一日中強い風が吹いて、時折太陽が顔を出すといった天候です」や「三月十五日に再び荷上げを再開の予定です」の文面も散見される。依頼事項の中に、何故か食べ歩きの本、大阪編、東京編各一冊という首をひねるようなものもあり、逆に、

三国合同登山隊事務局だより

MOUNTAINEERING IN THE ANDES—A SOURCE BOOK FOR CLIMBERS

JILL NEATE 著

第一部　地誌・登山史

ベネズエラ・エクアドル・ペルー・ボリビア・チリー・アルゼンチン北部・中部・パタゴニア・フェゴ島の各章に分類され、山塊別にそれぞれの山について標高・地形等の概要と登山史を解説している。

第二部　山岳・地名辞典

前記の山塊とサブピークを含む各山頂について初登頂及びその後のバリエーションルートでの登頂の年代・ルートとその文献が記されている。

第三部　参考文献一覧表

前記文献についてアンデス関係一般情報一九九点、ペルーアンデス五一〇点等総計二三〇〇余点の参考物が紹介されている。

追記、簡単であるが次の付記あり

1、各アンデス山塊及びピークの地図情報　2、各国の山岳会、政府関係先　3、山岳会誌情報　4、上記以外の南米における登山地域　5、登山関係用語のスペイン語対称表

前記のようにかなり詳述された二七七ページに及ぶアンデス全域の素晴らしい情報誌である。

これからアンデス登山を志すアンデニスタにとっては必携の参考書であると共に過去に登った方や関係者はその登頂がどのように表現されているか興味のあるところだ。ただし日本人による文献（英語・スペイン語）は数編紹介されているのみ。AA、AAJなどで紹介された日本人の登頂実績はここに引用されているが、日本語のみの登山記録は紹介されておらず誠に残念である。このようなことのないように今後は登頂報告など国際化の現状をふまえて英文のサマライズぐらいは記してほしいものと痛感した。

三国合同登山隊事務局だより

留守本部からの連絡の末尾に、「そろそろ、本来のセンスのあるアルピニストに戻られますことを切望します」をつけ加えると、これに対しBCからの文面の最後に、「文明人を脱却出来ないことを悔みつつも、利器に頼ってしまう。大本営より」云々。

この間に、橋本竜太郎名誉総隊長宛に、厚生省よりの国会関係のファックス、大塚実行委員長より、南北両隊長宛に、人・物の運行表を毎日、適確につかんで表にするようにとの指示、気象関係の連絡、斉藤総括隊長よりのドクターとしての要望等、従来と異った遠征のスタイルでBCと留守本部は大忙しである。

三月二十二日、橋本竜太郎名誉総隊長は、秘書として三辺夏雄本会会員、堀井昌子医師と共に北京経由でラサへ、TV隊と合流、三月二十六日、ルクズ着、三月二十九日BC入りをした。四月三日にはカトマンズ発、タンボチェよりヘリで南側のBCを訪問、四月四日、BCに滞在。四月六日、カトマンズ着、以前より関係されていたカンティ小児病院を訪問、また観光省で新任のシン大臣と面談、四月七日帰国の日にネパール山岳協会の会長、カドカ殿下、副会長、ポカレル氏と会い、八日に帰国という大変ハードな日程を強行された。

なお、今西寿雄総隊長は、神崎忠男秘書長と共に、四月十日、東京発バンコク経由でカトマンズ着、ネパール山岳協会を訪問後、副総隊長のグルン博士と共に、国境を越えて北側のベース・キャンプに入り、激励の後、議定書に従って、北京の総指揮部詰めになる。大塚実行委員長は、四月十一日、北京にたち、直接北側BC入りをし、登攀にそなえての指揮をとることになる。

南側は、隊荷の増加、通関問題、天候不順のためヘリが飛べず、隊荷の輸送の遅延等、カトマンズにて色々な困難に立ち向わねばならなかったが、磯野剛太登攀隊長、ならびに、最後まで根気よく交渉に当った湯浅道男南側隊長の努力で問題はやっと解決し、BC入りは大幅な遅れをとったが、アイス・フォール工作も順調に進み、予定通りABCをローツェ下部に建設し、登攀体制をとることになった。

いずれにせよ、三国隊員協同の作業で、言葉、習慣の違い等、大変なことである。特に、食事で問題が出ているようだ。重広恒夫登攀隊長は、ABC以上では、三国で平等に配分し、味つけは、それぞれの国の味つけですることも考えているという。色々と従来の登山とは違った問題にむかって夫々の解決に全員努力している。

＊

現在の募金状況（三月三十一日現在）

会員募金（七二〇名）　九、三五五、六〇〇円

企業募金（三八企業）三六、八三〇、〇〇〇円

会員の皆様の暖いご支援を感謝申し上げております。

三国友好合同登山会員募金応募者ご芳名

（四月十五日現在、一口五千円）

（六〇口）能見孟俊。（六口）大沢伊三郎、神崎忠男。（五口）笠原潤二郎。（四口）片桐理一郎、永瀬友美子、斎藤貞雄。（二口）斎藤俊哉、日下田実、吾妻山の会、吉川尚郎、成川隆顕、魚本定良、守田治夫、島田靖、横田春雄、大分山の会、三井嘉雄、佐藤有、荒井紀雄、小田切直人、山本幸生。（一口）小須田喜夫、松長晴利、松本慎太郎、中谷絹子、山上皓一郎、吉田節雄。

（累計一、八九三・一二口、八三四名、金額九、四六五、六〇〇円）

三国合同登山隊事務局だより

一九八七年六月刊、EXPEDITION ADVISORY CENTRE 出版、船便込み二五米ドル。

送金先 MISS JILL NEATE, HAVEN, HALLS MEAD, KESWICK, CUMBRIA CA 12 4BE, U.K.

（南井英弘）

画文集「仙山線から見える山々」

柴崎　徹著

よく車窓から眺めている山々を見て、会員ならず共、山の景観に見とれて、走りさる景色を追い、「あの山は」と想い、時が許せば途中下車し、登りたくなるのは小生だけではなかろう。

その胸中を悟るかのような本が、この一冊です。

仙台を始発として、山形市までの、現在JR仙山線から見られる景観を、見事なまでの山のスケッチと、エッセイに書き込めている。

東北の山々の短編を知ることが出来、息つくことも忘れさせてしまう。

蔵王山の紹介から始まり、栗駒山、七つ森、舟形連山、蕃山、太白山、権現森、大東岳、神室岳、鎌倉山と材木岩、面白山、瀬の原山、月山と葉山、白鷹山と朝日岳、龍山と甑岳、雁戸山僅か二十キロメイル足らずで二十もの山を車

窓より紹介している。小生など地元に居てさえはっきりしないでいた山並みも改めて「あー、あの山がそうなのか」と、納得もし、又、山の身支度と、リュックを探す始末です。

著者が学生の頃から毎日眺めた山々の想いを托したものであり、今では、仙台も、遷都問題で揺れ、高層ビルも立ち並び、JR沿線沿いも開発し、団地が並び市町合併で山形市と仙台市も隣接市になった。

ここにある景観を眺める事などは、到底考えられる由もないが、二十年以上も過ぎた今だからこそ、かえって新鮮に感じられ山心にかられると思う。

著者は、現在宮城支部の副支部長であり、宮城百山出版の責任者で、編集に取り組んでるが、宮城の山を愛し、又、海外の山を愛し、ネパール、中国へと出かけ登山活動を続けている。

この本は一九七一年七月に五〇〇部限定で出版されたものであり、非売品との事でもあり、会員皆様には手に触れる機会は少なかったと思いますが、本部の図書ルームに一冊あることと、此れを機会に小生も著者に増刷を進めたところ、考慮しますとのことでしたので、いずれどこかの出版社より近々出版されることでしょう。

東北の山々を知る上では是非手元において、山のスケッチを楽しみ、山に更けるのも最高の味わいと思う。

一九七一年七月刊、変形A5版　三二ページ　非売品　（佐々木豊喜）

おおさか自然史ハイキング

地学団体研究会大阪支部編

自然に親しむ方途にはいろいろな形態がある。単に、現在あるがままの山河に接することでよしとするのもしかり、あるいは、その創造の歴史をたずねることで、大自然の悠久なる営みに想いを馳せるのも一つの接し方である。勿論、楽しみの度合は、自然のなりたちや歴史に関する知識が豊富であれば、より大きく深く、収穫もまた多いはずである。

本書は山の書物とはいくぶん異質で、大阪近郊の自然を訪ねるときの案内書であって、山や登山を対象としたものではない。が、岳人とはいっても、いつもいつも遠くの山岳を目指すことは至難であり、多くは半日か、せいぜい一日程度の余暇を作り出せればよい方だ。そんな折り、私たちが週末のいっ時を野山ですごすために、どこか手頃なハイキングをと、思い立った時のよき道しるべとなる。

大阪は淀川河口に開かれた街である。本書は、その淀川を中心として明石から泉南までの海岸線一帯から、吉野や室生寺辺りまでを対象としている。古生代から現代に至る沿革を、地形、地質、化石、そして、古代遺跡や古墳などの様子を説きながら、その生い立ちを語る。本書を片手に、これら淀川河口や生駒山、六甲山などの山麓を訪ね、自然に親しむ若者や親子連れの姿が偲ばれるのである。

本書は、大阪市立大理学部地学教室を核とした、若い研究者、教師、学生などのグループによって執筆され、「大阪・神戸の自然を歩く」（一九七三年・創元社刊）の改訂版として編集したものである。「大阪平野のおいたちをたずねて」から「街の中で地球の歴史を学ぶ」までの六章からなる。

一九八七年四月、創元社刊、三二九頁、一三〇〇円　（安藤忠夫）

今年もさんけんで会いましょう

北陸の百山

朝日新聞富山・金沢・福井支局編

北陸地方には名山名峰が多い。中でも「立山」「白山」があり、剱岳や黒岳、薬師岳、奈良岳、妙法山、荒島岳、杁山、夜叉ケ池山など各地域の人々に親しまれて来た。

山それぞれは、山容にしろ、樹層にしろ、信仰伝説や歴史の山としても、豊かな自然の中で、生き生きとその特質を活かし、地方の環境を特徴付けし、シンボルとしても親しまれている。そのような諸点にたって朝日新聞社の富山・金沢、福井の各支局が編集した。そしてまた自然のもつ豊かさの中にあって、緑を守り育てる運動の一環として、汎く山岳ファンの公募に基づき百山が選定された。その上、ガイドブックとしても活用されるよう地図にメモを加え、各山の写真も沿えて、待望久しかった近来にない山岳書ともなっている。そして「人と自然」を識る上での参考書でもある。

能登印刷出版部刊（〒920金沢市高岡町5―14　電0762―22―4595）、一九八七年五月二十五日、定価二七〇〇円

（富山支部・石坂久忠）

日本の名峰500

日本の名峰　別巻

山と渓谷社編

この本は山渓創立五十五周年記念出

版のひとつとして作られたものである。日本の名峰シリーズ（全二十八巻、北は利尻山から南は屋久島・宮之浦岳に至る全国の名だたる名峰たちがオールカラーで全員集合！ それぞれの山をホームグラウンドとする第一線のカメラマンたちがその著者である）。発刊当初別巻を仮タイトルとして「山名総索引」と発表していたが、内容をさらにグレードアップして、山名を五〇音配列の〝山名辞典〟としても使えるようにしたものである。

「日本の名峰」①～㉘巻に収録された山を中心に、一般的な登山の対象となるもの、古来から知られる名峰などをもとにして五〇〇座あまりの山々をとり上げたとしている。日本の山々の数は多いが名峰と呼ばれるものが果して五〇〇もあるかやや疑問とするところだが、本書の構成はまたその中から幾つかの山々をピックアップしてその次の見開き頁にカラー写真で紹介し、単なる山名辞典として無味乾燥になることを避けるよう工夫されているところがよい。その写真提供者は三十一名の山岳写真家たちで、浅野孝一氏など本会々員の顔も見える。本書は日本の名峰全巻を購読した人に無料でプレゼントされることになっているが、そうでない人も一冊備えておくとなかなか便利な資料である。

一九八七年十一月一日　山と渓谷社
B5版変型　七七頁　定価一二〇〇円

（小倉　厚）

支部発行記念誌二つ

「設立三〇周年記念誌」（熊本支部）

昨年十一月十四、十五日、本会熊本支部の創立三十周年記念集会が阿蘇山麓の高森町で行なわれ、熊本支部の田上敏行会員がその様子を会報513号で報告している。

この記念誌は、その記念集会で参加者に配られたもの。

内容は三部に分かれ、最後の部分は挨拶や祝辞、西沢健一支部長による支部三十年の歩み、物故支部長への追悼文などがあり、第二部は十一名の支部会員が、それぞれの思い出を綴った随想、第三部には支部規則、会員名簿などがまとめられている。

特に第三部には、市販の「熊本百山」（熊本日日新聞社）のなかの低い山や都市周辺に偏り過ぎているものを訂正し、支部独自に選定した熊本百山リストが加えられている。

一九八七年十一月十四日、日本山岳会熊本支部刊、八二ページ、非売品

「もみじ会（第三十回記念）」（静岡支部）

静岡支部で行なわれてきた〝もみじ会〟は第三十回で最終となった。これはその記念誌。

内容は第一回から最終回までの様子を、その時々の写真やスケッチ、音信などをふんだんに散りばめ、また各回参加者の追想文も載せるようにして、一つ一つまとめてある。終りのページには、参加回数別の番付表を全参加者について載せている。

ふんだんに使われているこれら資料は巧みにレイアウトされ、雑然とした印象が少なく、参加したことのある者のだれもが、そのときのことを身近に想い起せる、これは〝もみじ会〟挽歌集ともいえるものである。

一九八七年十月十日、日本山岳会静岡支部刊、一四八ページ、非売品

（岡沢祐吉）

遥けき空に近ければ
—ヒマラヤ日記—

宮本　周三著

本書は一九六五年の早稲田大学ローツェ・シャール登山隊に参加したドクターが、当時の日記を中心に綴ったものだ。

人には、それぞれ生涯忘れ得ぬ体験がある。そして、いちばん輝やいた時がある。著者は前書きで「私の人生に、たったいちど、恐らくもう味わえないであろう〝キラリ〟とした光芒をみせてくれたもの。それは一日、一日、生死ギリギリのところで、生きていることを実感し、能力の限界に挑み、最後の青春を燃焼し尽したローツェ・シャールだろう。その意味で当時を自分なりに整理しておきたかった」と出版の動機を語っている。

ローツェ・シャール（八三八三）は早稲田が初めてヒマラヤに遠征隊を送った山である。七三〇〇メートルでの隊員の転落事故。酸素不足と救出作業の極度の疲労による発病とアクシデントが重なった。しかし、最悪の条件下で全員がなんとか下山した。

本書は著者の戦中、戦後の山の遍歴からヒマラヤ参加の動機へと綴られている。圧巻はやはり事故発生以降だろう。当時の隊員の思考、行動が医師の目を通じてリアルに描かれている。本音の文章は、歳月を乗り越えて情景がまざまざと浮かび上がる。また、本書に数多く挿入されているヒマラヤの花や風物は自筆である。その優しいタッチは著者の人柄が投影されており見る者にやすらぎを与えてくれる。

なお早稲田ローツェ・シャール隊の

望月達夫文庫目録（2）［前月よりの続き］

- Rickmers, W.R. Alai ! Alai !. *1930, Leipzig.*
- Roberts, A.R. Himalayan Holiday, New Zealand Himalayan Expedition, 1953. *1954, Christchurch*
- Robertson, David George Mallory. *1969, London.*
- Robinson, Mabel L. Runner of the Mountain Tops (The life of Louis Agassiz) *1939, New York.*
- Rock, J.F. The Amnye Ma-chhen Range and Adjacent Regions. *1956, Roma.*
- Rowell, Galen In the Throne Room of the Mountain Gods. *1977, San Francisco.*
- Russell, Scott Mountain Prospect. *1946, London.*
- Ruttledge, H. Everest 1933. *1934, London.*
- Ruttledge, H. Everest: The Unfinished Adventure. *1937, London.*
- Schätz, Jos. Jul. Wunder der Alpen. *1929, München.*
- Schomberg, R.C.F. Between the Oxus and the Indus. *1935, London.*
- Scott, J.M. Gino Watkins. *7th edition, 1946, London.*
- Shaw, Robert Visits to High Tartary, Yarkand, and Kashgar. *1871, London.*
- Sherring, Charles, A. Western Tibet and the British Boderland. *1906, London.*
- Shipton, Diana The Antique Land. *(Limited no.55), 1950, London.*
- Shipton, Eric Nanda Devi. *1936, London.*
- Shipton, Eric Blank on the Map. *1938, London.*
- Shipton, Eric Upon that Mountain. *reprint, 1947, London.*
- Shipton, Eric Mountain of Tartary. *no date, London.*
- Shipton, Eric The Mount Everest Reconnaissance Expedition 1951. *1952, London.*
- Shipton, Eric *The True Book about* Everest. *1955, London.*
- Shipton, Eric That Untravelled World. *1969. London.*
- Singh, Gyan Lure of Everest. *1961, Bombay.*
- Skrede, Wilfred Across the Roof of the World. *1954, London.*
- Smith, B, Webster Some Triumphs of Modern Exploration. *no date (c.1930), London.*
- Smythe, F.S. The Kangchenjunga Adventure. *1930, London.*
- Smythe, F.S. Kamet Conquered. *1932, London.*
- Smythe, F.S. An Alpine Journey. *1934, London.*
- Smythe, F.S. The Valley of Flowers. *1938, London.*
- Smythe, F.S. Camp Six. *1956, London.*
- Somervell, T.H. After Everest. *1936, London.*
- Spencer, S (ed.) Mountaineering (Lonsdale Libra.). *no date, London.*
- Stephen, L. The Playground of Europe (Silver Libra.). *1924, London.*
- Styles, Showell The Moated Mountain. *1955, London.*
- Teichman, Eric Journey to Turkistan, *1937, London.*

— 8 —

- Morgan, Gerald Ney Elias. *1971, London.*
- Morris, James Coronation Everest. *1958, London.*
- Mumm, A.L. Five Months in the Himalaya. *1909, London.*
- Mumm, A.L. The Alpine Club Register 1857-1863（Ⅰ）*1923, London.*
- Mumm, A.L. The Alpine Club Register 1864-1876（Ⅱ）*1925, London.*
- Mumm, A.L. The Alpine Club Register 1877-1890（Ⅲ）*1928, London.*
- Mummery, A.F. My Climbs in the Alps and Caucasus. *1895, London.*
- Mummery, A.F. My Climbs in the Alps and Caucasus. *1946, London.*
- Murray, W.H. The Story of Everest 1921～1952. *1953 (2nd edition), London.*
- S.F.A.R.(Swiss Foundation for Alpine Research) The Mountain World 1953. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1954. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1955. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1956/57. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1958/59. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1960/61. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1962/63. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1964/65. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1966/67. *London*
- S.F.A.R. The Mountain World 1968/69. *London*
- Noel, J.B.L. Through Tibet to Everest. *1927, London.*
- Norton, E.F. The Fight for Everest 1924. *1925, London.*
- Noyce, W. & R.Taylor Everest is Climbed (A Paffin Picture Book. p. 30). *1954, London.*
- Noyce, W. Scholar Mountaineers. *no date, London.*
- Noyce, W. South Col. *1954, London.*
- Noyce, W. To the Unknown Mountain. *1962, London.*
- Neve, Arthur Thirty Years in Kashmir. *1913, London.*
- Pallis, Marco Peaks and Lamas. *3rd edition 1942, London.*
- Palmer, H. Mountaineering and Exploration in the Selkirks. *1914, New York.*
- Pierre, B. A Mountain called Nun Kun. *1955, London.*
- Pranavananda, Swami. Exploration in Tibet. *1950, Calcutta.*
- Pye, David George Leigh Mallory. *1927, London.*
- Raeburn, H. Mountaineering Art. *1920, London.*
- Rawling, C.G. The Great Plateau. *1905, London.*
- Rey, Guido Alpinisme Acrobatique. *1929, Chambéry.*
- Rey, Guido The Matterhorn, Ed. by R. L. G. Irving. *1949, Oxford.*

— 7 —

記録は部報「リュックサック11号」のほか「アンデスからヒマラヤへ」（濱野吉生著）「幻想のヒマラヤ」（村井葵著）が出版されている。

一九八七年十一月一日、田代書店、二〇六ページ、定価二五〇〇円

（吉川尚郎）

吾妻山に死す

片平　六左著

〝福島女子師範生の吾妻山遭難〟これはわが国登山史上初めての集団女子登山パーティの遭難である。今から六十余年前の大正十五年九月、冷たい秋雨と、濃霧の中で起ったのである。

著者は〝あとがき〟に「本書の資料の殆んどは福島民報紙（地方紙）から集めた。いわば新聞記事の羅列である。外に貴重な『吾妻山登山記』の手記が根拠となった」と書いている。

当時、地方での登山というものの認識は薄く、限られた特定の人以外は、青少年の心身鍛練、集団生活の育成、と称して団体登山を実施したものが多かった。旧制中学生またはそれ以下のクラスの遭難が発生したのもその頃である。大正二年八月の木曽駒での高等科生徒、同じく七年十月の蔵王の仙台二中生徒の痛ましい事故、次いで本件と続くのである。

現在のように情報網が完備されていない当時では、地方の事件は殆んど地方の新聞のみで、記録の調査も地方紙に頼らざるを得なかったと思われる。また警察及び学校当局としても外部に公表する範囲は箝口令とまではいかなくても或る程度の制約されたものがあったであろうし、疑問の点も幾多残されたものもあったであろう。

このような点から遭難者の一人、案内人黒沢氏の縁続きの著者が長年に亘り記録、口伝えからまとめられ、或る程度の全貌が見出せるようになり、その努力には敬服するものがある。

改めて集団登山のあり方について大いに参考となるものである。いずれにせよ最後まで献身的に努力された引率の先生及び身を賭して犠牲者の軽減につとめた案内人黒沢氏の姿がふつふつと甦り頭の下がるものである。

一九八七年十二月二十五日、片平六左（福島市陣場町三―二〇）一五九ページ、非売品

（中嶋正夫）

「62年度新入会員メッセージ」より

総務委員会が新入会員オリエンテー

望月達夫文庫目録（3）

- Younghusband, F.E. The Epic of Mount Everest. *1929, London.*
- Younghusband, F.E. Wonders of the Himalaya. *1929, London.*
- Younghusband, F.E. The Heart of a Continent. *1937, London.*
- Younghusband, F.E. Everest the Challenge. *1945, London.*
- Younghusband F.E., *Painted by Molyneux, M.E.* Kashmir *1917, London.*
- Himalayan Journal vol.1 April 1929
- Himalayan Journal vol.2 April 1930
- Himalayan Journal vol.3 April 1931
- Himalayan Journal vol.4 April 1932
- Himalayan Journal vol.5 1933
- Himalayan Journal vol.6 1934
- Himalayan Journal vol.7 1935
- Himalayan Journal vol.8 1936
- Himalayan Journal vol.9 1937
- Himalayan Journal vol.10 1938
- Himalayan Journal vol.11 1939
- Himalayan Journal vol.12 1940

（以上 ed. by K. Mason）

- Himalayan Journal vol.13 1946 ed. by W. Noyce
- Himalayan Journal vol.14 1947
- Himalayan Journal vol.15 1949
- Himalayan Journal vol.16 1950－51
- Himalayan Journal vol.17 1952
- Himalayan Journal vol.18 1954

（以上 ed. by H.W.Tobin）

- Himalayan Journal vol.19 1955－56 ed. by H.W.Tobin & V.S.Risoe
- Himalayan Journal vol.20 1957 ed. by T.H.Braham, assisted G.C.Band
- Himalayan Journal vol.21 1958 ed. by T.H.Braham, assisted J.A.Jackson
- Himalayan Journal vol.22 1959－60
- Himalayan Journal vol.23 1961
- Himalayan Journal vol.24 1962－63
- Himalayan Journal vol.25 1964
- Himalayan Journal vol.26 1965

（以上 ed. by K.Biswas）

- Himalayan Journal vol.27 1966 ed. by K.Biswas, assisted. J.A.K.Martyn
- Himalayan Journal vol.28 1967－68
- Himalayan Journal vol.29 1969
- Himalayan Journal vol.30 1970

（以上 ed. by S.S.Mehta）

—10—

- Thomson, T. Western Himalaya and Tibet. *1852, London.*
- Thorington, M. The Glittering Mountains of Canada. *1925, Philadelphia.*
- Tilman, H.W. The Ascent of Nanda Devi. *1937, Cambridge.*
- Tilman, H.W. When Men and Mountains Meet. *1946, Cambridge.*
- Tilman, H.W. Mount Everest 1938. *1948, Cambridge.*
- Tilman, H.W. China to Chitral. *1951, Cambridge.*
- Tilman, H.W. Nepal Himalaya. *1952, Cambridge.*
- Tilman, H.W. Mischief among the Penguins. *1961, London.*
- Tucker, John Kanchenjunga. *1955, London.*
- Tuckett, F.F. A Pioneer in High Alps (1856～1874). *1920, London.*
- Tyndale, H.E.G. Mountain Paths. *1948, London.*
- Tyndall, J. The Glaciers of the Alps and Mountaineering in 1861. *(Everyman's Libr.) 1911, London.*
- Ullman, Ramsey Man of Everest, The Autobiography of Tenzing. *1955, London.*
- Ullman, Ramsey Americans on Everest. *1964, Philadelphia.*
- Vakhushti Institute of Geog. Soviet Georgia. *1960, Moscow.*
- Visser-Hooft Among the Karakorum Glaciers. *1926, London.*
- Waddell, L.A. Among the Himalayas. *1900, 2nd edition Westminster.*
- Weber, Jean Conquering Mount Alberta, 1925. *Off-print of A.A.J, vol* Ⅵ. *No.3. 1953, AAC, P.26*
- Weir, Tom East of Katmandu. *1955, Edingburgh.*
- Whymper, Edward Scrambles amongst the Alps in the years 1860～69. *1871 (1st edition), London.*
- Whymper, E. Scrambles amongst the Alps, Ed. by H.E.G.Tyndale. *1954, London.*
- Whymper, E. Travels amongst the Great Andes of the Equater. *1892, London.*
- Whymper, E. + Supplementary Appendix to travels amongst the Great Andes of the Equater. *1891, London.*
- Whymper, E. Travels amongst the Great Andes. Intr. by F.S.Smythe. *1949, London.*
- Wilson, A. The Abode of Snow. *1875, London.*
- Workman, F.B. & W.H.Workman In the Ice World of Himâlaya. *1901, London.*
- Workman, F.B. & W.H.Workman Ice-bound Heights of the Mustagh. *1908, London.*
- Workman, F.B. & W.H.Workman Peaks and Glaciers of Nun Kun. *1909, London.*
- Workman, F.B. & W.H.Workman The Call of the Snowy Hisper. *1910, London.*
- Workman, F.B. & W.H.Workman The Exploration of the Siachen or Rose Glacier, Eastern Karakoram, *reprint with some additions of G.J. 1914 Feb. 1914, London.*
- Workman, F.B. & W.H.Workman Two Summers in the Ice-Wilds of Eastern Karakoram. *1917, London.*
- Young, Geoffrey Winthrope Mountain Craft. *1921, (2nd edition), London.*
- Young, Geoffrey Winthrope On High Hills. *1927, London.*
- Young, Geoffrey Winthrope Mountains with a Difference. *1951, London.*

—9—

ション用に編集した小冊子から、会員諸氏に呼びかけているもののみを次に掲げます。

＊

●昨年四月から木曽に勤務しております。山に囲まれた所で、特に新緑はすばらしいです。自然の美しい所ですので、会員の方でお出でになる方はご連絡下さい。（一〇〇二〇　**長野県木曽福島町・鳥橋祥子**）

＊

●九州の片田舎に住む山男です。近年ファミリートレッキングを楽しんでいます。数年後にはヒマラヤに家族ともども挑戦したいと思っております。かつて数年間、ネパールに住んでいましたので通訳は可能です。遠征隊、調査隊、トレッキング等、必要なときには遠慮なく声をかけて下さい。様々な情報をお待ちしています。（一〇一八九　**福岡県三橋町・森田修示**）

＊

●気品のある山行を目指して入会を希望しました。承認の通知が届いた時はたいへん嬉しく思いました。有名山岳ばかりでなく、地味な山、地元や周辺の山を、鳥を愛でながら、花を眺めながら、樹に教わりながら歩きたいと思っております。妻もいずれは入会したいと申しております。四国山行ご希望の方にはいろいろと便宜がとれます。（一〇二二一　**愛媛県松山市・戸嶋平八**）

野鳥十題

小林碧郎

淋しさに日雀のゆする霧氷林
鷹の舞ふ甲斐駒へ尾根凍りたり
仙台虫喰北岳の秀も雪を脱ぐ
幾雪崩累ねし跡や三十三才
鶯鳴くや雲中鬱と遠雪崩
山葵咲き巣立ち急かるゝ川烏
星雅雲湧く谿の雪崩れつぐ
小瑠璃鳴き日照雨に開く破れ傘
月ながら栂の闇濃し虎鶫
岩つばめ霧に沈みし一ノ越

報告

九州四支部連絡会開催について

昨年、熊本支部創立三十周年記念行事の際九州四支部の行事の調整や情報交換の場をつくってはとの提案があったので、本年二月六日（土）、七日（日）に北九州市門司区の〝めかり山荘〟に各支部から二十六名の参加で連絡会を開催した。

六日は、十九時頃から懇親会をはじめた。権藤福岡支部長のあいさつには

じまり自己紹介と段々ムードも柔かくなり、最後は各支部の楽しいコーラス等がでた。大広間から事務局の室へと会場は移り、夜おそくまで歓談が続いて素晴しい情報交換の場となった。

七日は、九時から各支部の六十三年度の事業計画が発表され、出来るだけ他支部の行事にも参加することを決め予定の時間を過ぎて会議は終った。会議後、近くの風師山（三六二㍍）に地元の堤会員の案内で登った。頂上には、槇元会長の記念碑が立っていた。頂上からは関門海峡と周防灘の素晴しい景色を見、再会を楽しみに散会とした。今後も機会を作りこの連絡会を続けたい。

参加者（順不同）

宮崎支部　大谷　優、大谷セツ子、石井久夫、岡本眞理子、古市幸子

東九州支部　西　孝子、甲斐良治、加藤英彦、阿南寿範

熊本支部　本田誠也、田上敏行、川端浩文

福岡支部　権藤太郎、吉村健児、重村伝平、堤甚五郎、柴田重太郎、新貝勲、松本康司、成末洋介、児玉俊子、野田多恵子、古賀久男、副島勝人、斉田貴典

（福岡支部・深田泰三）

会務報告

三月理事会

三月九日　午後六時三〇分

場所　本会ルーム

出席者　今西会長、大塚、村木副会長、浜口、関塚、大橋、田部井、岡沢、織田沢、鈴木、勝山、西村、太田、早坂、小林、新井、大森各理事、山野井、小倉各評議員

委任　鴫原、松永理事、松田、平林評議員、山本監事

審議事項

＊明治学院大学　梅里雪山登山隊一九八八　の名義後援の件　承認

＊昭和六十三年度収支予算案編成

前回の理事会の後、三月四日に財務委員と常任理事による予算案の検討を行ない、配布資料をもとに審議を行なった。山岳索引、山日記、図書、名簿作成、海外ガイドブック、長期計画準備積立金等について変更ないしは条件づけの検討を経た後、収支予算案は可決した。

委員会報告

＊総会の日程は五月二十七日から五月二十日（金）に変更する。

＊海外　六月二十八日　ジャワの山

＊フィルム　六月に加藤保男氏のエヴェレストの映画会を開く。

＊集会　四月二十四日黒姫山、五月十四、十五日山形支部の協力を得て若葉会山行

＊婦懇　四月十六～十八日富士山トレーニング、筑波大での低圧トレーニング

三月九日現在のシヴァ登山参加者　十四名、トレッキング　六名

＊医療　六月十一日日本登山医学シンポジウム開催。

＊科学　四月十六日シンポジウム「危険な動物と安全登山」、本年の秩父宮学術賞は「妙高火山群」であった。

＊山研　四月三十日開所。
＊総務　オリエンテーション参加者四十七名の予定。
＊三国登山　本日ネパール本隊出発し登山隊は全員出発した。
留守本部　本部長　鈴木郭之、事務局中沢光江、経理　西村政晃、スタッフ神崎忠男、顧問　松田雄一
募金状況　会員、六九一名、一、七三二・一二口、八、六六〇、六〇〇円
企業、二十団体　二二、二〇〇、〇〇〇円
今後の予定（橋本龍太郎、今西寿雄、大塚博美）
橋本　三月二十二日から二週間、北京～BC～ネパールBC
今西　四月十日～五月一日／五月十日～十二日　ネパール～チベット～BC～北京
大塚　四月十一日～五月十日～十二日　北京～BC
登頂予定日　五月五日、八日、十二日
祝賀会　北京（三国登山隊正式）六月三日、カトマンズ　五月三十日（提案中）東京　六月十七日（後援者）
以上

（3月）

1日　会報委員会、山日記委員会
3日　婦人懇談会
4日　常務理事会、財務委員会
7日　総務委員会
9日　理事会
10日　山岳編集委員会
11日　総務委員会
12日　新入会員オリエンテーション
14日　資料委員会
15日　海外委員会
16日　三水会、山研委員会
17日　図書委員会
19日　山岳史懇談会「立教の山」
22日　自然保護委員会
23日　婦人懇談会スライド会
24日　山日記委員会
25日　科学委講演会
28日　フィルム委員会

3月来室者410名

会員異動　3月

物故

茶谷　東海（五一五二）1・17
織田　収（三九一九）3・1
多田　隆峰（五九一六）3・30

退会

二宮　澄郎（九五七〇）
本間　康之（九三七六）
木村　能彰（七二〇七）
清水美代子（五九九六）
坂本　真一（九七四〇）
三宅　清子（八九二四）

帰国

宮沢　熙行（八六五〇）台湾

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

⊙講演会

講演「初めてのヒマラヤ」
講師　沢野　公氏

イラストレーターであり、山の雑誌でも活躍中の講師は、この冬、アンナプルナ北面への遠征隊に参加して帰国しましたが、その新鮮な目で見たヒマラヤや、高所登山の体験を中心に話して貰うつもりです。特に、大学生諸君や若手の皆さんの参加を歓迎します。

日時　五月三十日午後六時半より
場所　本会ルーム

以　上

高所登山研究委員会

＊

⊙海外委主催の集会

六月四日（土）四時より
H・A・カーター氏講演会
題＝「ナンダ・デヴィ登頂の憶い出と私の山々」（仮題）
同氏歓迎会　六時より「トレビの泉」
会費、三千五百円程度

お願い　婦人懇談会

先にご案内しましたTシャツがやっと出来上り入荷しました。
婦懇主催今夏シヴァ登山隊を支援して頂きたいと思います。スポーツ界で静かなブームとなりつつある驚異の素材オーロン製、保温性が高く薄くても温かで水分をはじき下着としても最高です。
ブルーグレー＝LL・L・M
ワインレッド＝L・M・S
価格各二千円
（送料）一枚240円、二枚350円
申込先＝〒102東京都千代田区四番町五－四日本山岳会婦人懇談会。
〒184小金井市貫井北町一－二十三－二十二　大塚玲子
（☎ 0423-85-8277）
※現金と送料の切手同封の上お申し込み下さい。
事務局にも置いてあります。

Tシャツデザイン
婦人懇談会委員
篠田澄江会員

六月二十八日（火）六時半より
題＝「ジャワの登山」　児玉　茂
七月十二日（火）六時半より
題＝「冬期アンナプルナ登頂」
―講演と映画　山田　昇
九月七日（水）六時半より
題＝「南極の基地あれこれ」
村山雅美
※以上の場所はすべて本会集会室
海外委員会

＊

⊙映写会

日時　六月七日（火）
十八時三十分より
題名　「厳冬のエベレスト」
（栄光最後の記録）
講演　塚本福次郎氏
この映画は故加藤保雄さんが一九八二年の冬期エベレストに登頂された時の記録映画で、世界冒険とスポーツ映像大会で優秀賞を受賞した作品です。
フィルム委員会

＊

⊙談話会

六月十日（金）六時三十分、ルーム
高山植物　宅間清子氏
科学研究委員会

＊

北海道支部からお知らせ

⊙日本山岳会一九八八大雪の集い

今年の集いは、一昨年宮崎支部担当の、九州山の集い86―みやざき、昨年京都支部の87比良の集いに続いて、今年三月開業した青函トンネルを通り、北海道で行ないます。（津軽海峡線には上野発、札幌行北斗星〔Grand Course〕が、一日二往復運行されています）。
山行は、大雪山国立公園、最高峰旭岳（二二九〇・三㍍）。全国各地の会員を迎えて、楽しく懇談したいと思います。
初夏の北海道は、緑が美しく映え、大雪山は、雪渓のほとりに高山植物が咲き始める。アイヌ語で、ヌタクカムウシュペと呼ばれ、山麓には、温泉が湧出している。旭岳温泉は、旧湧駒別温泉のことである。大いなる自然のくに北海道を訪ねてみませんか。

実施要項

期日　七月十六日（土）～十七日（日）
場所　講演・開会式は、旭川市七条九丁目旭川市民文化会館小ホール。懇談会は上川郡東川町旭岳温泉
宿泊場所　上川郡東川町旭岳温泉湧駒荘　電話（〇一六六）97二一〇一
登山　大雪山旭岳一帯
日程
●七月十六日午前十時三十分、支部事務担当者会議。午後一時、講演会、続いて開会式。午後四時、バスにて旭岳温泉へ。午後五時三十分、鮭と牛のチャンチャン焼きで蝦夷の山を語る。
●七月十七日、朝食後、午前七時三十分ロープウェイ集合。午前八時三十分、姿見→旭岳頂上へ。正午下山→間宮岳→中岳分岐→中岳温泉→裾合平→姿見。午後四時、旭岳温泉→JR旭川駅解散。
参加申込み　昭和六十三年六月二十日（月）まで氏名、住所、生年月日、会員番号、自宅電話番号、勤務先、血液型を明記の上、〒004札幌市白石区厚別中央一条七丁目一五ノ一ノ四一〇
日本山岳会北海道支部　全国大会係宛
会費　一万五千円（宿泊、記念品、記念誌、昼食、乾盃等含）
参加費は、申込要領明記の申込書に添え、郵便振替、銀行振込、現金書留等で申込んで下さい。
●郵便振替　日本山岳会北海道支部　小樽九―一六九三七番
●取引銀行　三菱信託銀行札幌支店　普通口座　一三一一三七二

⊙越後支部
懇親登山へのお誘い

新緑と残雪の山、南魚沼郡清水の巻機山で、越後支部懇親登山会を計画致しました。
JAC会員の皆様多数お誘いの上、越後で大交流会を開き、旧交を温め、新交を作り出しませんか。

記

期日　六月十一日（土）十二日（日）
会場　南魚沼郡塩沢町清水で宿泊
巻機山、清水峠、です。
行動　登山斑＝ヌクミ沢→頂上→桧穴の段→清水帰着。
遊歩斑＝清水峠往復、山菜等を楽しむ散策。
送迎　越後湯沢駅で十七時卅分発のバ

スを用意致します。

会費 一泊三食付　六千円程度

申込 新潟市営所通一学生書房
電話、〇二五―二二二―九八七〇　へどうぞ

※越後魚沼の銘酒「八海山」もおまちして居ります。

越後支部

＊

◉講演会

集会委員会では今年度三回の講演会を企画しました。第一回には、静岡の〝石間信夫〟氏をお招きして石間流山登りについてお話を聞きます。多数ご参加下さい。

日時 六十三年六月二十一日（土）
午後六時三十分より

場所 本会ルーム

集会委員会

＊

◉戸隠修験道の講演会と探索山行

恒例の探索山行、今年度は山岳宗教のメッカ戸隠に出かけ、九頭竜信仰など探って見たいと思います。

このため、左記のように、先ず来る七月一日（金）の夜、ルームで講演会を開きます。続いて七月十六日（土）戸隠の中社宿坊に泊り、現地で戸隠神領と顕光寺との関係など古文書を拝見しながら伺います。翌十七日（日）は奥社に詣でた後、二班に分かれ、それぞれ表山縦走と戸隠高原の散策を行なう予定です。奮ってご参加下さい。

◎**講演会**

日時 昭和六十三年七月一日（金）午後六時半

場所 日本山岳会ルーム

講師 武蔵大学教授　宮本袈裟雄

題目 戸隠修験道

◎**探索山行**

集合 昭和六十三年七月十六日（土）
午後四時半二沢旅館（戸隠中社宿坊）

講演 九頭竜信仰の話　長野高専教授
二沢久昭氏。懇親会、宿坊泊

探索山行 七月十七日（日）

A班　奥社―八方睨―表山―不動―牧場バス停

B班　奥社―森林公園―中社―宝光社―バス停

（解散はバス停午後四時頃）

探索山行参加費 八千円（一泊三食、保険料等）、非会員八千五百円、現地徴収（参加取消二千円）

申込 昭和六十三年七月一日（金）まで日本山岳会科学研究委員会宛

※探索山行の詳細については後刻、参加申込者に連絡します。

科学研究委員会・資料委員会

◉第四十二回ウェストン祭

●六月四日（土）午前六時、島々宿を出発し、徳本峠を越える。

●六月五日（日）午前十時、ウェストン碑前祭。

参加者は徳本峠を越えて上高地へ入る意義を充分に認識して下さい。

信濃支部

◉「三国友好登山隊」記念Tシャツの頒布

八八四八㍍峰はこの春、中国、日本、ネパールの三国の登山隊による友好発進基地となりました。

今回のこの快挙を記念して、この三国友好登山隊のマーク入りTシャツが作られましたので、会員皆さんにお分け致します。数に限りがありますので早めにお申込下さい。

▽〔色〕白、ブルーの二色

▽〔サイズ〕各色　S、M、L

▽〔価格〕各　一五〇〇円

郵送ご希望の場合は、現金封筒に一着につき一七五〇円（送料込み）と色、サイズを明記して日本山岳会事務局へお申込下さい。

なお、地方の方は支部を通じてご注文頂くようお願いします。

総務委員会

訂正 会報三月号（513号）の七ページにある「この道、山と本とJACと」の筆者、孫慶錫氏が韓国山岳会長となっていますが、これは「韓国山書会長」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

なお、韓国山岳会会長は李崇寧氏ですので、念のためお知らせしておきます。

（編集）

編集後記 今月号の「お知らせ」欄はご覧のとおり、盛沢山です。全部とは言いませんが、どれか一つにご参加を。

（編集）

昭和六十三年五月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六 赤坂グレースビル
印刷所 株式会社 技報堂